

自然の不思議と神秘を感じる感覚

2020年12月11日 遠藤清賢

自分の部屋は真ん中にテーブルがあるのですがそのテーブルの上に本棚に収まらない本が積み重なっているのです。楽譜と本、定期購読している雑誌等があまりにも乱雑に積み重ねられていて、これではいけないと思い、埃のたまっているこれらの本の整理をしているとレイチェル・カーソンの有名な著作で「センスオブワンダー」という本が出てきました。小さな本です。夏に保育園の蔵書を整理していたときに廃棄されようとしていた本なのですが、捨てるには勿体ないので、私がもらった本なのです。他に「沈黙の春」という本が有名だったということ思い出しました。ページ数も60ページ程度だったので、整理するのをやめてページをめくりました。著者が姪の生まれただけの幼い息子と一緒に自然の探索をしながら、自然の豊かさと神秘、そして不思議を感じながら、お互いにその感覚を楽しんでいる様子が、季節の移り変わりの中で変化する自然の営みと共に情感豊かにつづられているのです。

本の整理を忘れ読み進めるに従って自分の神秘や不思議に対する感性、それを感じる感覚が衰えているのに戸惑いを感じてしまうのです。今の自分にはこの感覚は失われてしまっているように思いました。そして幼稚園に通う前の幼いころ4歳くらいことを思い出してみました。春から秋は家の周りほとんど水田でした。水田のあぜ道には、たくさんの虫がいて、水の流れている幅50cmくらいの堰には鮒やドジョウ、水の淀んだところにはメダカが群れを成して泳いでいました。また、蛙やゲンゴロウや水すまし等、水生の昆虫もたくさんいるのです。そして、朝から夕方まで一人で虫を取ったり、魚を取ったりして遊んでいました。当時、自動車はほとんど走っていません。田んぼの幅の広い堰に自分で作った釣り竿を持って鮒やドジョウを釣るのが楽しみでした。自分の家の周り約200m四方が私のテリトリーでした。夏は真っ黒に日焼けし、冬は霜焼けを作り、鼻水を流して凍り付いた田んぼの中や傾斜のある場所でそり滑りをして遊んでいました。今の子どもたちのような塾や習い事など全くないのですが、祖父から時々、字の書き方、読み方、数の数え方を教えてもらった記憶がありますが、この時間は私にとってはとても忍耐の必要な時間だったと思います。早くこの時間から解放されるために頑張ったように思います。すべて懐かし思い出です。

今の子どもたちは私たちのような自然の中で遊ぶ楽しさをほとんど知らないと思います。虫や鳥の声、風が肌をこする感覚、足元を水が流れる感覚、草むらの匂い、土を掘り起こした時の匂い、裸足で感じる土の柔らかさ、雪を踏む音、木枯らしの音等、今の子どもたちは体験したことがないかもしれません。時間の変化や季節の変化によって目にする虫や小動物たち、草や花、その小さな命たちとの出会いや、それらの命との語らいが、とても懐かしく思い出されるのです。毎日太陽が出て、月が出ること、雲が空に浮かび流れること、夜の星の小さな光、夜の静寂、流れ星、どうしてこのようになっ

ているのか、大人に聞いてもみんな違う答えが返ってきて、世界は不思議で満ちていたのです。神様がそのようにしたという大人の答えに、世の中は神秘的な大きな力によって生み出され、動いているのかもしれないと思っていました。身近な自然が遊び場で、その中心に自分がいて、全ての命が自分の仲間であり、友人であり、時には不思議な魔法使いのように感じていました。その毎日がとても楽しく、全てが満たされた幸せな時間を過ごすことができていたと思います。しかし、幼稚園に通うようになってから何かしら楽しさは急激に失われました。逆に心配事が増えたように思います。生まれて初めて集団の中で過ごすことに不安と戸惑いがありました。幼稚園は正直行きたいと思ったことはありませんでした。小学校も同じでした。友達ができて徐々に楽しく過ごすことができるようになったと思いますが、授業は正直我慢の時間でした。小学校に通うようになっていたときは幼い時過ごした時間はすっかり記憶から消えてしまいました。

現代の教育は不思議なことや神秘的なことは空想に過ぎず、人間が生きるためには何にも益がないように扱われています。今の日本は豊かな想像力や夢を持つことが難しい社会になっているのかもしれませんが。そのようなことより「現実を見ろ」と子どもたちに訴えています。「人間が生きるうえで益になるものを見つけ出せ。」ということが生きる目的であるというような教育が続けられていると思います。ですからすべてにおいて目に見えること、説明がつくことが求められる世の中になっているのです。あらゆる事象について表面的なことしか理解できなくなっているのが私たちがなのかもしれません。不思議や神秘的なことを想像できることは、見えないその深淵にある大切なことを思いやることができるようになるのです。神様や仏様、宇宙の姿、芸術、真理や思いやり、優しさと勇気、これらのことを感じるができるのは、自然の神秘や不思議を感じる感覚があるからです。信仰心はこの感覚がなければ理解することができないと思います。また、言葉の無い赤ちゃんの訴えを理解するのもこの感覚です。寝たきりで言葉を失ったお年寄りの思いを理解できるのもこの感覚なのだと思います。「センス・オブ・ワンダー」とはこのようなことも含まれているのだと思います。

幼い子どもの心を共感できるのは神秘や不思議を感じる感覚があるからです。子どもたちの心はほとんど神秘的な感覚、不思議さに満ちています。それを否定してしまうような育て方は違うのではないかと思います。現代社会は子どもたちから大切な能力を取り去っているのかもしれませんが。その子どもたちの心を共感することによって、子どもたちの豊かで、優しさに満ちた心をそだて支えることができるのです。自然の中で獲得した季節の変化、様々な命、これらに触れることによって人間が持っているあらゆる感覚が刺激され、生きることの喜びと、生かされている安心感を持つことができるのです。そして自分は人間であることを自覚し、命の大切さを知ることができるのだと思います。この感覚があることによって私たちの生きている世界はさらに豊かな喜びに満たされてくるのです。私たちが年老いて「死」を迎えるときにも、この感覚によってこの「死」も自然の出来事、営みとして受け入れることができるような気がします。